

成果・業績主義である新人事処遇制度がN E Cで導入されましたが、社員間、管理職間の競争の激化、頻繁な評価などにより、ストレスが激増し、健康破壊や過労死の増加が心配されます。

以下の記事は、[成果主義]の先進国、アメリカのシリコンバレーにおけるワーカーのストレスの実態をルポしたものです。日本の「働き中毒」顔負けで、参考になると思いますのでぜひ、ご一読を！

高給はストレスの代償

2000.9月1日 日経産業新聞 「電腦ウォッチ」より

「もともと落ち込みやすい性格だったんですけど、2年前の夏は本当に精神的に最悪の状態になってしまいました」と話すMさんは大手オンライン企業の中堅プロデューサー。2年前うつ病による自殺企図で精神科に強制入院させられた。

「直接のきっかけは、同じ会社に勤める恋人との関係悪化なんですが、仕事も忙しくストレスもたまっていたと思います」。Mさんは当時バックアップのいないポジションについて、休暇もほとんど取れなかったという。勤務時間は1日10時間以上。「その大半の時間はコンピュータとにらめっこ。精神的に追いつめられてしまい病院に駆け込んだのですが、入院した時も会社に病欠の電話を入れて仕事の指示を他の同僚に伝えました」。

現在は抗うつ剤を服用しながら仕事をこなすMさんだが「あの入院騒ぎ以来、責任の重い任務は避けるようになりました。出世はあきらめたっていうことですが、まあ健康が一番大事ですから」。Mさんは今、ガーデニングやいやし系の音楽にはまっているという。

生き馬の目を抜くというたとえがぴったりのシリコンバレー。世界中から集まった才能が日々競争に明け暮れるこの地で生きるには、高いストレス耐性が要求される。しかし何かの拍子にその「タガがはずれてしまう」こともある。

「多いですよ。この地域ではうつ病になって病院の戸をたたく人は」とサンホセ市で精神科クリニックを営むデービッド・ゴールドスtein医師は言う。場所柄彼の患者の大半はシリコンバレーのハイテク企業で働く人々だ。「人生の達成度の高い、頑張り屋が多いのです。頑張りすぎて燃え尽きたりしてしまうんですね。」テンションの高い生活を送るうちに精神の柔軟性が落ちてきて、失恋、人事異動、株価の低下など他のストレスが引き金となり、張りつめた糸がブツンと切れてしまうらしい。

いろいろな調査結果を照らし合わせても、シリコンバレーのストレス度の高さは明らかである。生活費の上昇に合わせるために、常に比較的ペイの高い仕事に就いていなくてはならない。そのためには常時自分のスキルを磨き「市場価値がある労働者」であることが不可欠だ。

(中略)

「痛勤時間」と同じく、仕事時間も増加傾向にある。スタンフォード大学のインターネットに関する最近の研究では、インターネットを定期的に使用している人々は、オフィスでの勤務時間が増加したうえに自宅でも残業していることが報告された。この地では多数の人が「常にネットに接続」した状態でいる。自宅のパソコン、モデム付きの携帯情報端末、携帯電話などでいつもアクセス可能にしているのだ。

部下が夜9時に出したメールに上司から午前1時に返答が帰ってくることも珍しくない。長期休暇中でも、ノートパソコンでメールを読み、平均1回は会社に電話を入れるという。また、ウィスコンシン大学の精神科医ネイサン・シャピラ博士が1998年に発表した調査によれば、過剰な時間をオンラインで過ごしている人々は、様々な精神的異常が驚くべき高率で見受けられるという。

その精神的異常とは躁鬱（そううつ）病、拒食症、さまざまな恐怖症、不安、脅迫症状などだ。1日のうち12時間以上をオンラインで過ごしてしまうシリコンバレーのITワーカーには警告となりうる調査結果である。また、別の調査で「長時間オンラインで過ごす人々は、社会とのつながりが希薄となりやすく気分が沈みやすくなる」という結果も報告されている。

このような状況をかんがみて企業側もそれなりに対策を立てている。福利厚生の中に「ストレス・マネジメント」の無料セミナーを取り入れている会社が多い。このような企業の一つであるネットスケープ社ではその種のセミナー（リラクゼーション、呼吸法、ストレス・コントロール法）を定期的に開催し、会社の中で受けられるマッサージサービスやヨガのクラスも提供している。同社では保険の中に特に「精神医学と物質乱用」を扱う健康保険も用意する。シリコンバレーのIT企業での高賃金は、高いストレスと引き換えに得られるものなのだ。

(在米ライター・菊池えみ)